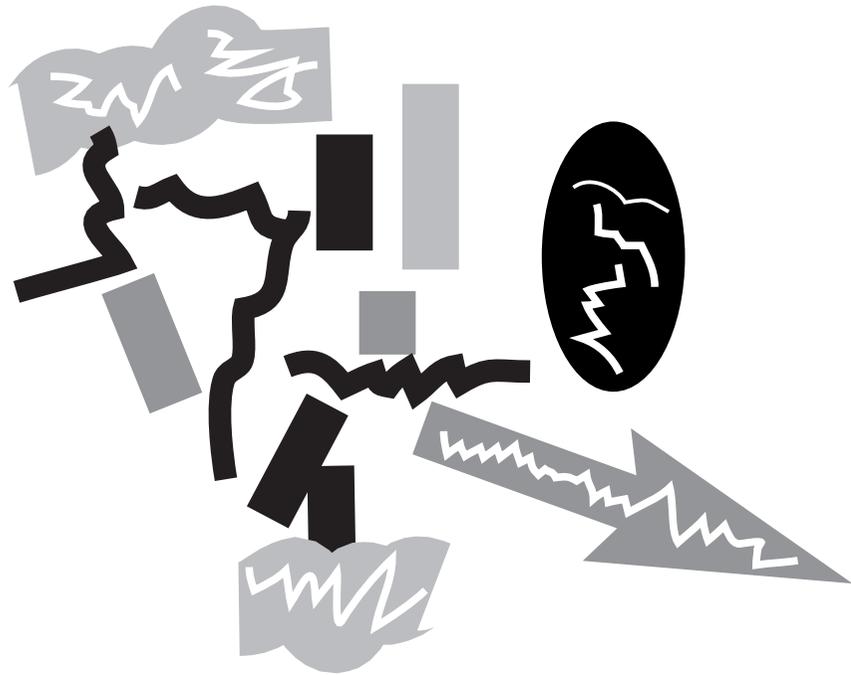

月 刊

Mélange

vol.80



2013.04.28

詩／エッセイ・書評

月刊 「Mélange」 VOL.80

2013/04/28

月刊 「Mélange」 編集部

詩

80号巻頭作品 ねことイガレスさん	木澤豊	3
透明なビニールに	中嶋康雄	4
死罪の春	岩脇リーベル豊美	5
さくら、櫻。	福田知子	6
家族の葛藤	にしもとめぐみ	7
電球の傘に	川田あひる	8
手打ちにいたす	野口裕	9
愛された古紙	月村香	10
腰を浮かせて藤棚の下	大橋愛由等	11
みぎわ	高谷和幸	12
遺棄	寺岡良信	13
液化してゆくピアノと舌下のカミノリ	有時秀記	14
百貨店	富哲世	15
寺岡良信著『凱歌』	にしもとめぐみ	16
書評		
エッセイ		
〈詩人通りより〉4 「赤い花、白い花」	岩脇リーベル豊美	17
〈夜の調べに寄せて〉47 「映画『飢餓海峡』が突きつけたもの」	寺岡良信	18
〈神戸詞あしび〉69 「愛される詩人であるということ」	大橋愛由等	20

◆ねことイガレスさん

木澤豊

古い大きなマンションの邸宅に
立派なたてがみをもったねこが住んでいた
おばあさんになった美しいイガレスさんと
まどから夕日にひかる屋根が波打っている
その部屋では 一語づつ
集まった友人たちの指先からあたらしい
ことが白紙にこぼれ落ちて
白い波が立っている

わたしが歩いて行く海
と陸のあいだ

そこを歩いて行くのは 癒えては繰り返し血がにじむ
ひとつの長い傷あとだった
たとえば 少年の姿をした

この窓下の見えない港に向かって右手の

路地を少し入ったところの
すり減った木の階段をあがった部屋が
僕たちの隠れ家だったことがある
血が少しいた白いヘルメットなどが乱雑に
隅にあつて

うん それはイガレスさんとまったく関係ないけれど
それは それで ひとつの そこに
ただよう 他の 他の記憶なんだろう

いまは いまは
イガレスさんのたてがみのある猫が
足にすりすりしたので しゃがんで手を差し出すと
いきなり引つかかれて
あの夕方の波打ちぎわのように
赤く美しく水平線に血がにじんだ というだけ
のことだったのだけれど

ああ この夕とどろきがかすかにきこえる16階から
あの海の赤いひかりが みえるだろうか
と窓辺に寄ると
おっ はるばる はるかに

美しく長い傷あとを
わたしのむこうに見た

◆透明なビニールに

中嶋康雄

透明なビニールに水滴がくっついていて、水滴は、ビニールに比して、生命の始原性に満ちて震えている、と感じられて、ふと考えてみれば、ビニールは石油のなれの果てであり、石油は太古の生命のなれの果てであり、水滴よりは、より生命に由縁があるといえなくもない。

太陽に溶けたアスファルトを蟻が歩く。蟻はアスファルトの溶解に足をとられながら

歩く。頭までもがアスファルトに埋もれ、蟻は歩けなくなり、もう死ぬしかない。横を自動車走る。小さい物にとつては永遠に近い時間が過ぎ、夜露は干からびた蟻を濡らすだろうが・・・まだ生きています。頭もげても、まだ。それでも、死ぬしかないのだけれども。

スギナは、今年も風に吹かれている。石炭紀からの生き残りだという。汚い老犬が小便をかける。目やにが両目に垂れ下がり、目玉は白い。スギナは、そのとがった頭をよけいとがらして、その黄濁した老犬の水分を、ふるふると喜びにうち震えて享受する。冬毛が十分に代謝し尽くさないそのぼさぼさの老犬はゆっくりとその片足を下ろし、ゆっくりと欠伸を重ねる。あと何回欠伸をすれば死ぬのだろうか。

◆死罪の春

岩脇リーベル豊美

遠心の月は滔々と満ち
堰止められた光の淵に
微粒子の渦巻く音が聞こえる
解放を待つ位相の手前で
仄かに揺れる錠前に差し込むはずの
燻し銀の鍵はいまだ見あたらさない

湧きはじめる色彩
刻々と変わる心風景

漸く朝が這い出すと
その傾いた頸筋で
冬の時間に包み隠されていた十字架が
一瞬露わに浮かびあがり

確かめることもなく
行き過ぎた

春

誰もが住処を離れ

また住処に戻り

生命の横溢を愛でる

愛でられないもののために祈りながらも

森全体が死罪を叫ぶとき

野うさぎたちが一斉に雪残る原を

死に物狂いで横切る幻視につまづく

貧しい言葉の限界が

地平の境界のように線を引く

春

真偽への躊躇いが

そこかしこで

意味付けをもとめ芽吹いている

◆ さくら、櫻。

福田知子

(一)
花を逃れ やがて
花に在る
この櫻みちにあり
雨に濡れて 佇むひとよ

春雨はいたくなふりそ桜花
いまだ見なくに散らまく惜し
も(万葉集)
―…春雨よ柔らかに降り、まだ見ぬ花を散らすなよ

空のいただきから降りつる 雨のつゆ
しとしと しとしと
さわさわ さわさわ
ざわざわ ざあざあ
徒然に いたくなふりそ
いたくなふりそ

あまつゆに めれて
はなつゆに めれて
櫻みちに佇むひとよ
春の雨 さくら雨
いたくなふりそ

(二)
きみに初めて出逢った 春
きみといつしか離れた 春

去年の春逢えりし君に恋にてし桜の花は迎へけらしも
(万葉集)

櫻の樹には しびとが似合う
わたしが恋したひとは たしか しびとであった
さわらぎのみちで すれ違い
加茂の河原で すれ違い
櫻のもとでふたたび出逢った
酒盃にはなびら うかび

その櫻のある場所を探しに行った
もう一五〇〇年も昔のこと
帝が遣わした物部氏は
私のおい こひびと
酒盃にかぶはなびら
はなびら ながれ
月日も ながれ
加茂は ながれる
つゆにぬれた髪を
ほてつたうすもいろの髪を
この櫻のあいだ 心のあいだ 髪
のあいだ
幾度目かの春を想う
櫻、さくらよ!

(三)
美の極みの
民の聖樹 聖なる樹の櫻 から
散る櫻 生命の花びらへ
歌舞伎の演題にもなった 櫻
それからだ
櫻が散る生命の象徴になったのは――

「櫻の樹の下には屍体が埋まっている」といった梶井基次郎を
こよなく愛したあなたは なぜかイタリアの地を求めた
あなたの名前は 純音
イタリアに着いたあなたは タクシードライバーに身を任せ
いたりあの市民権を得た
そうして 非常に哀しくなつて あなたは
いつしか海へと向かい 貝殻をあつめ 流木をひろい
くずのオブジェを創り 真珠のような詩を書いた
現代を近代のように生きたあなた
詩集『空の時間』は蜘蛛出版社からはじめて世に送りだされた
けれども
あなたは選つてこない
櫻のように あなたは転生しなかった
おなじ春が
もう二度とめぐつてこないごとく――

(四)
近代最初の桜文学は樋口一葉の『闇桜』
薄命の美少女の死を染井吉野に象徴させた

―落花らっか

地面を埋める幾層ものはなびら
風にあおられ 雨にながされ ひとに踏まれ 土に還る
薄桃色に透け
落花する
あまたの 櫻花
あまたの 近代の美意識

(五)
あはれ花びらがなれ をみなごに花びらがなれ
をみなごしめやかに 語らひあゆみ
(三好達治「いしのうえ」)

木花開耶姫(コノハナサクヤ姫)
エドヒガンザクラ、ヤマザクラ、オオヤマザクラ、オオシマ
ザクラ、ミネザクラ
これら山の櫻姫たちはこぞつてあかるい
こぼれるような 山櫻の花房
咲笑が絶えない 山櫻の花房
散るときもこれら山櫻たちは
天心爛漫

しかし
哀れなのは ソメイヨシノ
ソメイヨシノこそ哀れだ
お国の為に深く散るいのちの象徴
短く咲き 花びら散り 美しく咲き 花びら散り
勇敢に咲き 花びら散り・・・
靖国に 千鳥が淵にこの春も散る

さくら、櫻。
サクラ、サク。
さくら 櫻
サクラ、サク!
さまさまのこと思い出す桜かな (芭蕉)

◆ 家族の葛藤

にしもとめぐみ

胸に刺さつた異物は
長い時間をかけて
あなたの数知れない言葉にはぐくまれ
私の不器用な言葉をあつめて
ある日
真珠のように輝いていたのです

うそではありません
誰かの傷を癒やしているつもりが
いつのまにか自分の傷をくるんでいたこと
真珠のように

◆電球の傘に

川田あひる

電球の傘に
タオルがさがり
ささやかな日々のいとなみが
映っている
円の中にあるちいさな暮らし
と 思えるようになったのはいつからか
苦しくて くるしくて
駅へむかって
雨に濡れた頭皮逆立つ病の切断
世間は
恐怖にみちて
いつ
だれに 非難されるか
ネクタイを締め
正座し
悶絶した
苦しかった無言にも
じかんは
血潮の弁を開閉し
シャワーカーテンをピンクに
冷蔵庫を買った 二〇一二年
快方への兆しか 睡眠は錠剤で保たれ

丸い傘を感じられる
傘の上に傘が
覆い被さっていること
傘の上の傘のそのまた上に傘があり
傘 とする
愚かしさ
いや、
あれは
一発
命中の
原子爆弾
黒い雨が降る
六日
九日
核廃絶の署名活動に立ちつづけた
Aさんが
逝った
病気まなかのわたしに
社会に
対峙せよと
叱ってくれた
Aさん
虚ろな
耳鳴りに
語りかけてくれたひと

◆手打ちにいたす

野口 裕

普段見慣れている看板の手打ち豚カツという言葉が妙なも
のだと気づいた途端に、お手打ちの豚カツなれば春惜しむ、
とさらに変な句へとなり果てた。言葉に奇妙さの潜むのが常
態ならば、それにつまづくのも常態であるべきはずのところ
を不思議とつまずかずにここまでやって来た。座るといふ字
のふたりは土の上のすわり、ふたつの木を示しながら煙は厳
しく糾弾される。二匹のカエルが乗っている葉っぱの上にな
らに三匹乗ると全部で何匹ですかという問いかけに、みんな
葉っぱから落っこちると答える小学生のようにすべてつまず
けば良かったものを。すでに遅すぎる。雨がエルが絶滅危惧
種となる前の気ままなる旅かなわず、つまずきの種さえ残さ
ず雲は流れる。

そこでようやく気がついた。つまずく代わりに立ち止まる
のだと。立ち止まれば景色がつんのめる。だから手打ち豚カ
ツなのだ。西から上った豚カツが蒲団着て寝る東山、時間割
るのは組織びとあだこうだと人を釣る。大菩薩峠に間の山
節というのがあったなあと思いつくのもこんな瞬間だ。

金塊二体睦み居る涅槃像

◆愛された古紙

月村香

女の子は街で購入した古紙に手紙を書きはしなかつた枕元に一枚だけ置いて頬にすりよせていたそれはその女の子だけの遊びだったひとりぼっちの遊びだったその表面に青いインクで文字を書いたならばどんな気がするだろうと思つてはそんな汚ならしい発想はすべきではないとそうわたしには少し熱があるのでベッドからは離れないわという具合に精神を集中し紙に対しては崇拜をし本当に狂っていることも知らないで

◆腰を浮かせて藤棚の下

大橋愛由等

ヴェルデが一斉に蜂起する朝——嘘をつきはじめて目覚まし時計を許すかどうか逡巡し——回すたびに「やめて」とキイキイなるシチリア製パスタ製造機をつかい——昨夜は英英辞書がチェコ語で寝言を繰り返していたのはうすうす知っていたけど——鉄瓶で湧かした湯をゆっくりさまざまと羊水になるのよってなんとも言うものだから——いま食べたパタタの記憶はサビ猫の夢を孕んでいたのではと確かめてみたのだけれど——北側にベランダがあるアパルトマンでないとは黒色伝書鳩は来ないの——この部屋にフラメンコのタンゴリズムは似合わないと思う——スペイン産オリーブオイル入り整髪料を揮発させるとニンフが出現する民話なんてあるかしら——明け方にわたし（たち）を訪れた風がまだサッシの外側に待機していて——ヒマラヤとカイラスの水晶を近づけるとハウリングを起すからと——この五日間白藤に夢を吸い取られていたことは二人とも気づかないままに——抽斗の二段目右端にしまっておいた絵葉書が勝手に凶象を替えてしまい——つぎつぎと現れては消えるシーニュに悩まされながら——いきなりの雷におののいているうちに気づいたことは——第三倉庫の鍵は小栗鼠に預けておいたこと——藤棚の下に座るのは春雨に打たれるまででありしかも少しだけ腰を浮かせておこうということ

◆みぎわ

高谷和幸

一枚ものの重いドアをボタンと閉めて、わたしは大きな冷蔵庫になりたかった。閉じられたそのときその時の手掛かりを残して。薄れていく写真と予定表の刻限がまだ動いている。つねに、白い布に染み（汚れ）のようにある世界のシンドロームが歯のあいだでたたくあらし。そんななかで一時的食（消滅）という侵犯を低温で止められるだろうか。冷蔵庫は変わり果てた姿で、汀に打ち上げられる明け方もあるだろうに。夢の続きが物体になごりをとどめるように、腹を満たすことばに変わり、あなたとのあいだにあたたかい気流を巻き起こしてみたかった。いつの時代であったか、夜の動物園の「あれは詩人が観じた回転だろうか」モーツアルト的動物磁気が、水の力で水車のように回されるのは許されるものではないんだよ。思わず、「水の回転ではまずい」と、虎や豹が取りつかれやすい宇宙の回転物質を、温度ではない温度で保存してあげたかった。と言うと、あなたは「あなたの剥製はいたんでいるから」食べられないと言う。あれは、イクノという山に囲まれた村で、あなたと私によく似た二人と出会った。夏休みの一日を冷たい水に足を浸してすごしたことがあった。小さな魚を狙って鷺が窺っている。剥製の曲がった首をさらに捻じ曲げよう

◆遺棄

寺岡良信

海は巨きな沈黙の手でわたしを置き去りにした
時が絶え果てる蒼い崖に
石となつた巻貝のころにも疼く
官能のかそげさー
忘れられた抜糸のやうに

◆液化してゆくピアノと舌下のカミソリ

有時秀記

革命歌作詞家に凭りかかられてすこしづつ液化してゆくピアノ
(塚本邦雄)

「液化してゆくピアノ」のように液化することで比類ない七色の音幻の形態をまとおうとする崇高な無への意志は、しかし、カミソリの刃が、見えない舌の下からつきつきと飛び出し、「液化してゆくピアノ」に突き刺さるという悪鬼そのままの妨げにけいれんする。

「液化してゆくピアノ」の形態はみずからを気高い像として残そうとするが、カミソリの刃の何枚かは、液化してゆく速度をらくらくと乗り越えてピアノの残像を切り裂く。オーロラのような七色の色彩は霧散し、液化そのものとは違う作用に見舞われた残像は、舌下から発する悪鬼の領域に身をさらさざるをえずに四分五裂する。

この残像の四分五裂は無痛ではありえない。この痛みは「液化してゆくピアノ」の足を呪縛し、液化を阻害しつづける。液化作用と、切り裂かれた残像は、永久凍土のなかで固形化し、S字状に綱を引きあいつづけ、仮死の水となる。

◆百貨店

富 哲世

なんていうことのない話だ

壁一面が煤けたピロイドで覆われた

古い百貨店のひとけの無い玩具売り場の

高い天井の下にひとりいて

わたしは裁かれていた

別世界のように遠く深い梁の辺りに

巨大な傘が開くように

薄桃色の一輪の花が浮かんでいて

長く伸びたその花糸の先に繋がれて

一台のヘリコプタが

黴た空気をかきまぜて

カタカタと旋回しているのを眺めながら

ふらふらと立っていた

枚拳にいとまのないほどの訳などは

だれにでもある

たとえばきのうわたしはバスの窓から

散り終わろうとする桜の花や緑の枝々や樹を

なにげなく遣り過ごして

駅に向かう坂道の上の明るい空を

ぼんやり眺めていた

無論その花の梢のひとつひとつには

万象のたましいとその記憶が宿っているというのに

ピアノが液化してゆく美しさは崩おれの美であり、残像の切り裂きの醜さは崩おれの醜さである。崩落の裏と表にあるS字状の美と醜。そのくびきを解きはなつのは、液化にともなう液の澄明性と、「液化してゆくピアノ」が奏でる音調の純粋性であり、それらは崇高な無への意志を持続的にまよっている。

尋常の耳には聴こえない純粋音楽と仮想されるまぼろしの音源と、語りえないものを語るのが言葉だと仮説されて語られた言語群と、見えない美を仮視する永久凍土の透視力。これらあたかもスペクトル様状の三相によって、形づくられる名付けえない形態を与えられるのは、S字状に固形化した美醜を超え、善悪を越えた霧のような狂性の領域への変容によってであり、このような狂的内界のフォルモロジーを記号化するのには崩落から回帰する溶ける時のさなかである。

名付けえないものが純粹に与えられるのは、回帰する彗星の一撃に仮死の水が打ち砕かれ、内に包まれた法が、強くけいれんしながらカオスモスの「法」に感応するときのみである。そのとき仮死の水は真珠の涙である。その涙は与えられたことを知らないままに、無底の器なき器に微細なまでにびつたりと、彼方の法の神経樹が浸透しているということによって与えられるのである。かの花のまぼろしが視える巨大な危機の瞬きのように。クズレオツ天地ノ真中イチ輪ノ花ノマボロシ*。

*原民喜の詩句より

いのちと引き換えにしても会いたい者が眠っているというのに

わたしは道端の小石を

うっかり蹴飛ばしてしまった

石は占い師のように

壁と舗石の間の

草の生えた細い割れ目に転げ落ちた

わたしは影を踏んで通った

影の下には

血のぬくもりと澄んだ暗い眼差しが

忘れないでとまだ熱くささやきかけているというのに

こうしてわたしは白いハンカチで濡れた手を拭いている

ステンドグラスを通つてくる

ひなびた世界をうかがっている

がらんとした売り場のはるか向こうの

おもちゃのお城とうさぎの縫いぐるみの陰で

虫ケラのように小さく小さく

引き裂かれるほど叫んでいる声

それがわたしの刑罰だろうか

呪いと救いの姿だろうか

なんていうことのない

他愛のない話だ

古いビルの角を曲がると

車もまばらな横断歩道の前で

祭りの真新しい提灯が何気ない横顔で

知らんふりで立っていた

『凱歌』は『ヴォカリーズ』『焚刑』に続く三冊目の寺岡良信詩集である。まず、びつくりするのは、ページを開くと現れる詩の表記が、歴史的仮名遣いで書かれた詩であることだ。このような表記に美を感じ、表現に使われる漢字やひらがなのひとつひとつに、こだわりをもって掌であやすように言葉の詩の中にはめ込んでいく象眼細工師の手際がある。対句や、透徹した語句がある。

かなしびを縦糸に
かなしびをさらに横糸に
（「履歴」部分）

月の光が組み立てたあなたの喉を
月の光が組み立てた工具で外し
（「調律」部分）

かすかに鎖骨の砕ける音がして
星が墮ちた
翼は戻れない
白鳥の産み月はいつも渇水期
（「不在」部分）

書評

寺岡良信 著 詩集『凱歌』

図書出版まろうど社

にしもとめぐみ

詩の言葉の中に音を感じる。KAなSIび/K AなSIびなどの詩句のリフレインや、つKIのひK AリがKUみたてた / つKIのひK AリがKUみたてた KOうぐで / はずSI / K A S U K Aに S A K O つのKUだK E R おとが S I て / うみつKIはいつもK A つ S U I K I / に出てくる、K音、S音の繰りかえしに、そう言う楽器があれば「白い骨と月の光で出来た骨琴」のような幽かで乾いたやさしい高音を奏でていそうだ。

八月の時計の
白金の螺子を巻くとき
海はひとり
呟きを繰り返かへしても憂い
（「石段」部分）
きらきらと尽きないさざなみに
船底は排水を放つて
側溝といふ側溝が
満月を呼び込んだ
（「側溝」部分）

石造りの祭壇をひとすぢ
光の帯がうねって流れた
それは四月の蛇
常春の使者
（「神殿」部分）

光であざやかな詩句といえは西脇順三郎の、
「(覆された宝石)のやうな朝/何人か戸口にて誰か / とさゝやく / それは神の生誕の日」(「天氣」)を思い起こす。語句の音や字面が光を呼び込み、光を燦めかせる絵画的要素から画像が鮮明にイメージされる。
他にも連想される逸話や映画のシーンを思い出させるものもある。

回廊で踰躭めいたのは
重ねた杯のせみではない
敗北は突然に来た
貴族たちの宴が
賞讃のうちに果て
月が欠けた金貨となつて
静寂を凍らせる
暁のアトリエで
彫刻家は悟つたのだ
（「軽蔑」部分）

ギリシャ神話やルキノ・ヴィスコンティの映画を想起させる詩句がある。寺岡良信の知識や教養が縦横無尽に散りばめられている。詩の舞台はいつも異国や海それに過去であることが、駆使されている歴史的仮名遣いと共鳴してどこかあらぬ世界へ私を誘ってくれる。寺岡良信にしか書けない詩的世界だ。最後に彼の社会性を感じさせる詩句をあげよう。

海峽は陸地の裂け目か
父よ あなたの人生の裂け目か
聴くがいい
魂たちの地鳴りを
砕かれた民族の散骨が
明日は
雪のやうに
紺碧の背を
（「海峽」部分）

『凱歌』の詩は、すべて二文字のタイトルから成り立っている。詩集はすでに目次から始まるといわれるがここにも寺岡の美意識がにじみ出ている。今後どのようなオリジナルな詩句で詩を造形していくかますます楽しみにしている。

詩人通りにも春が訪れた。町全体が盆地で、その高台にあるので色とりどりに花が咲き乱れているのが眺められる。今年冬が厳しい、というよりも長く、クリスマス頃は生暖かい天候だったが、それ以降太陽を見ることがないまま、謝肉祭および復活祭を迎えたので、初めての陽光のもと目下一斉に、連翹、雪柳、木蓮、アーモンド、さくらんぼ(桜といふのか)、山ナシ、林檎、そして露台の前のプルーンも花開かせている。足元を見ても、萼、雛菊、蒲公英、小振りのチューリップがスノードロップとクロッカスに次いで路傍いっぱい春である。

この春で、大学の同僚だったBetinaが主催する詩工房Poetische Werkstattに、ひよんなことから参加するようになって三年になる。ゼメスターに区切つてほぼ隔週の水曜、皆女性で仕事もあり子

詩人通りより / 4 赤い花、白い花

岩脇リーベル豊美

供もいたりするので、夜八時十五分から九十分に限り詩を練っている。練る前にBetinaの報告やディスカッションがあり、即興詩を書く時間はほんの十分足らずで、ドイツ語を母国語としないものには簡単ではない。今夏学期の主なテーマは「赤」および「リズム」で、それ以外にも各自各回、自分が冷蔵庫のドアに貼っているような詩を紹介することになっている。ハイリッヒ・ハイネだったりエルゼ・ラスカー・シュラーだったり多様だ。先週は私の番になり、冷蔵庫のドアには貼っていないけれど、そして詩工房の通常とは傾向を異にはしているけれど、思うところがありヴィットゲンシュタインの断篇を幾つか読み上げた。

ヴィットゲンシュタインは彼の哲学全期を通じその認識論および言語批判において頻繁に色の譬えを遣っている。後期に、赤色が感受されるとき「赤」という言葉がどのように使用されるのかという問いに対して、私的経験および私的言語を構想しながら、自己の感覚の経験に沿って心理的に適う表現が赤と発せられると言う箇所がある。(Philosophische Untersuchungen I, 273-275.)それがどこかに引つかかっているか、私が読み上げたのは、ヴィットゲンシュタインとウィーン学団のやり取りを記録したもので、その表現が詩的でもあると思つたものである。論理的論証の後「哲学者は詩人であるべきだ」と書き残したことも想起した。「私は赤いつつじを見るのではなく、つつじが赤いということを見る。この意味で、つつじが青くないということをも見ている。見られるものにおいて結論がなされるのではなく、私が見るとき既にそれを直接知り得るのである……私が見るものすべてが赤いとしたら、そしてそれを描写するとしたら、それは赤ではないという文も作れなくてはならないことになる。これは既に他色の存在の可能性を前提としているのである。もしくは赤とは私が描写できない何ものかである、そうなる私にまた(つつじは赤いという)文は作れなくなり、同じくその否定もできなくなるのである。赤という色は諸色の体系を前提としている、それとも赤とは、何か全く異なるものを意味するのだろうか、だとしたらその色を言うことに意味はなくなるだろう。ならばそのことを語ることもできないであろう。」(W. Wasmann: Wittgenstein und Wiener Kreis, 87f.)

詩人通りから外を見渡すと赤い花はまだそれほど咲いていない春である。詩工房の一詩人が言った、春の森のイメージは白、白い花。

昭和二十九年九月二十六日の夜更け、函館地方を襲った台風十五号により、青函連絡船の洞爺丸が座礁・転覆し、一一五五人の犠牲者を出した。同じ日の夜、積丹半島の西の付け根に位置する岩内町で火事が発生、折からの強風に煽られて街の中心部に燃え広がり、消失戸数三二九八戸、死者・行方不明者三十八人を含む罹災者一六六二二名という大惨事となった。水上勉が一九六二年に「週刊朝日」に連載した『飢餓海峡』は、偶然重なったこの二つの災害から想を得た長篇サスペンスである。物語では敗戦の傷跡がまだ生々しい昭和二十二年、刑務所を出所した三人の男が質屋に押し入って金品を強奪し、火を付けて逃走する設定となっている。その後仲間割れが生じて二人が殺され、大金を独り占めにした主人公は死屍が累々と漂う嵐の海を漁船で下北まで渡り、その金を元手に一地方の篤志家に成り上がってゆく。

この小説を、内田吐夢が三國連太郎を主演に据え、骨太な映画に仕上げた。内田はこれを十六ミリのフィルムで撮り、粒子の荒いどこまでも暗い画面は、事件の悲惨と主人公の荒涼とした心象を鬼気迫る迫力で表現して、観客を圧倒した。

金品強奪と仲間割れからの殺人は、台風で連絡船が遭難するという海難事故の膨大な犠牲者の数に隠れて、成功したかに見えた。映画の後半で明らかにされる殺人犯の生い立ちは、凄絶を極めた飢餓地獄そのものである。奥丹後半島の一角にへばりついた寒村の生家には、わずかに露命を繋ぐだけの畠しかなく、少年は凍えるような

の更生のために三千万円を寄付した。名は樽見京一郎；だが八重の確信は動かない。「犬飼さんだわ」熱いものが八重の胸を苦しく満たし、彼女は矢も楯もたまらず舞鶴行きの汽車に乗る。この映画の圧巻は、八重を豪邸に迎え入れた主人公が、彼女をかき抱き、「犬飼と違いまんねん、樽見でんねん」と泣きながら女を絞め殺す場面だろう。私は大学生のとき、京都府立文化芸術会館でこの映画を観、三國連太郎の演技に心を抉られた。その顔は、過去を知る女が突然現れたという驚愕と恐怖だけではなかった。さらに笑みさえ浮かべて、殺されてゆく女。左幸子の演技も妖しいまでの魅力が湛えていた。男と女を邂逅させ、それが必然であるかのように引き裂いてしまう運命というものの、甘美で残酷な本質。この映画にはもう一人の重要な人物が登場する。沈没した連絡船の引き取り手のない二体の遺体を、仲間割れで殺された強盗犯だと睨み、失踪した犯人の行方を執拗に追う初老の刑事、弓坂である。八重が恩人の爪を抱いていたように、弓坂も、犯人が乗ってきた船を焼いたと見られる灰を紙にくるんで持っている。食べ盛りの男の子を抱え、戦後の生活苦を引きずりながら、真相を突き止めることに執念を燃やすだつの上がらない刑事を、喜劇役者のバンジュンが好演したことも、この映画の大きな魅力だろう。人生の辛酸を味わい尽くし酸いも甘いも噛み分けた苦勞人を、伴淳三郎はその寡黙な表情と背中

夜の調べに寄せて

NO.047 寺岡良信

映画『飢餓海峡』が突きつけたもの

泥田に胸まで浸かりながら、苛酷さを遙かに超えた労働に堪えた。だから、大金を手中にした主人公には、質屋を襲ったことも、仲間を海に投げ込んだことも、罪ではなく、今日まで自分に牙を剥き続けてきた不条理な運命への復讐として意識されたはずであり、蹴倒され踏みつけられてきた尊厳を奪い返す闘いの、初めての勝利であったにちがいない。

だがその勝利は、一夜を共にしただけの娼婦に情けをかけたことよって、崩れてゆく。ここにこの物語の複雑さがあり、主人公の幾重にも屈折した心の迷宮がある。内田吐夢の映画は、わずかな油断とミスから完全犯罪の企みが露見してゆく、ありきたりのサスペンス劇ではない。これは冷酷で残忍な犯罪者の心の底の逡巡、情に絡め取られるその弱さにまで洞察と想像力の錘を降ろし、犯罪とその崩壊に、人間存在に横たわる不可解な闇の領域から迫ろうとした重厚なドラマなのだ。

欲情を吐き出すためだけの田舎の安女郎に、奪ってきた大金の一部を与える男がいるか。それをいつまでも恩義と感じ、自分が切つてやつた男の爪を肌身離さず身に付けて男を慕い続ける娼婦などいるか。そう批判する人々は、内田監督が造形した人物を表層的な類型でしか見ていない。握り飯を頬張り、天真爛漫にふるまう杉戸八重と、底知れぬ飢餓に喘ぎ、暗闇を這いずつてきた犬飼太吉は、想像を絶する貧困と不幸を架け橋として、魂の最も深い部分において出会ったのであり、類型からはみ出た二人を確かなリアリティで描き出したところに、この映画の真価があるのだ。

その出会いから十年後、東京に出て酌婦になっていた八重は、手にした新聞に男の顔を見出す。舞鶴の篤志家が、受刑者で、見事に演じて見せた。小林信彦は『日本の喜劇人』の中で、「一本だけ、文句なしに頭を下げたのがある。内田吐夢監督『飢餓海峡』（東映）の初老の刑事役で、これは絶品であった」と記している。

八重殺しは容易に割れた。樽見は捕らえられて留置場にいる。食品会社を営む地元の名士。貧しい人たちへの慈善事業を私費を投じて推進する名望家。彼は舞鶴まで足を運んできた弓坂に懇願して、北海道に連れて行ってもらおう。その樽見に落日のときが訪れる。青函連絡船の甲板で弓坂が経を唱え、海に花束を流したその一瞬、樽見は海峡に身を躍らせたのだ。茫然と立ち尽くす刑事たちの影。懺悔は水底まで届いたのだろうか、本物の落日が地と地の裂け目に、躊躇うようにゆつくりと沈んでいった。

三國連太郎が亡くなった日、私は『飢餓海峡』を観たくて堪らなくなり、レンタルビデオ店を数軒回ったが、どこも貸出中だった。三國が主演した作品は、『神々の深き欲望』も、『切腹』も、『復讐するは我にあり』も、皆素晴らしいが、大学時代に知り、その後繰り返し観たこの映画は特別だ。先ほども書いたが、ここには人と人との出会いさえ自在に操る、運命の甘美さと残酷さが凝結している。大病に見舞われ、人生を後わずかに残す身になった現在、私は自分の辿ってきた道が、蹉跌と悔恨の連続であったことに、今更ながら驚きを禁じ得ない。虚無は私の青春の早い段階から、すでに巢を張り巡らせていたのではないか。おそらくは滅びの予感とともに。

三國連太郎氏の訃に接して



同志社大学にある「尹東柱詩碑」の前で

愛される詩人であるということ

二月十八日(月)、「第一回在日韓国詩人・日本詩人共同尹東柱詩人追悼会」が降りやまない冷たい雨の中で挙行された。同志社大学今出川キャンパス内(京都市上京区)にある(尹東柱詩碑)にはすでに多くの花束と筆記具が献じられていたのであった。一六日の忌日より二日遅れで開催したがために、この若くして日本国家によって殺された詩人がいかに愛されているかを知ったのである。

当日参加者に配布した冊子に、金里博氏はこう書いている。詩人・尹東柱(1917-1945)が清く澄んだ信仰心に裏打ちされた詩想と詩世界は清く、繊細で美しく、広く力強いものだったが残酷な日本官憲によって開いたばかりの花の形で終わってしまった。しかし、それでも作品が残った事は不幸中の幸いだった。その後発掘された作品と共に最初に出版された30篇の詩は七万コリアンと世界の詩人および詩愛好者たちに清澄さ、美しさ、そして力と勇気と信念と夢を与え、また今日もそれが引き継がれている。

私にとっても以前より気になっていた詩人であった。国家権力によって若き生命を絶たれた無念さを思い、かつ私と同じ学び舎で学んだ大学の先輩として、なんとかして向き合いたいと思っていたのだ。

転機が訪れたのは二年前だった。私が奄美についてを、コリアンコミュニティー研究会で発表した際に、藤井幸之助氏と知り合った。関西のいくつかの大学で朝鮮語を教える藤井氏は、韓国・朝鮮、在日社会についての情報をメールニュースとして流している。去年の始めころだったか、二月一六日のいわゆる「尹東柱忌」について書かれた意見があった。私はそのメールに反応して私がかかわる形で追悼会をなんとか開催したいのですと伝えたのである。しかし、去年は忌日が近づきすぎて実現することはなかった。そして一年後の今年になって、藤井氏や、金里博氏、上野都氏を初めとして、尹東柱に対して日頃から思いをにかけている詩人、友人たちに声をかけて実現したのである。

尹東柱について調べていくうちに、彼が京都時代に書いた詩稿を含めたノートや所持品が官憲(京都府警下鴨警察署)に押収されたままになっていて、その所在をめぐって問い合わせが続いている人たちがいることを知った。いまわれわれが接することができる日本滞留時代の詩稿は立教大学に在籍していた時のものであり、同志社大学在学中のものは含まれていない。生命を絶たれても、詩篇が残っているかぎり、何人も故人とめぐりあうことができる。時代の闇の中に収蔵されているかもしれない尹東柱の作品を想い続けるのは、これからの私のありようのひとつであろう、と思いをなしている。

「第一回追悼会」は、キャンパス拡張工事のさなかに静寂と行われた。上野都氏は、尹東柱の「たやすく書かれた詩」の返歌として書いた作品を朗読した。「大地も凍るといふあなたの故里から／こんなにも大切なものばかりを／小さなカバンに詰め／他人の名前で／旧い都へ／ほんとうは／あの北の地へ置いてくればよかったのか／あなたの言葉／あなたの薄い微笑み／そして／あなたがあなたであるゆえの詩」

在ることを深く願っているからこそ、研究者たちは遺品の実在を確かめようと奔走し、詩人たちはいつしか接することができると思っている。未知の詩稿を読もうとしている。

詩と評論

月刊『Mélange』 VOL.80
めらんじゅ

2013年04月28日 通巻80号
発行所/月刊『Mélange』編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集人/大橋愛由等(『Mélange』同人)
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円(税込)